

# 地球を回ってきた青年が、地域に根付いた農業者に

佐藤省吾さん、尚美さん（むかわ町）

世界の食を支える「農業」を自分の生活基盤に

佐藤省吾さん(39歳)の経歴を見ると、20代はほぼ海外で過ごしている。福



佐藤省吾さんと尚美さん。子どもたちを保育園に預けて夫婦2人で施設園芸に取り組む

島県津若松市で育ち、室蘭工業大学に進学。そのまま技術職の道へ進む選択もあったが、「就職する前に1年くらい世界を見ておきたい」と思い立ち、ワーキングホリデーでニュージーランドへ行ったのがきっかけだった。「ワーホリでいろんな国の人と接するうちに、発展途上国の問題が現実的に見えてきました。なぜ多くの人が飢えて亡くなるのか、何か自分にできることはないのか、若いながらにそう思ったのです」。

アメリカの支援団体で募金活動をしながらボランティアを学び、アフリカや東南アジアへ渡った。そして、途上国の貧困問題に取り組むNPOに入り、農業技術の普及や支援活動などにかかわってきた。そんな経験を重ねる中で、自分の生活基盤として「農業」を始めることを決意し、30代になる節目に日本へ戻ってきたという。平成20年の秋、「新・農業人フェア」の東京会場、札幌会場に足を運び、「気候と交通の便がよく、通年型農業ができる」ことから、胆振管内むかわ町を選択。生産者が新規就農者の育成に熱心で、独身でも受け入れ



夏の栽培管理の様子（写真提供：むかわ町地域担い手育成センター）



長女のすずちゃんとう長男の敢太くん

てくれることも決めた手になった。町内には、独立就農を目指す人のプログラムと研修施設もあったが、省吾さんは農業法人への就職を希望。「その時は独身だったので、人を雇う法人経営を見ておきたかった。それと、自分は割とのおんびりした性格なので、2年間の研修で就農するよりも、5年くらい経験を積んでから独立したい気持ちがありました」。

ムに就職。指導農業士でもある中興社長のもとで、地域に合った施設園芸を学び、トマトの担当を任せられるようになるまで栽培技術を磨いた。

**仕事も、家庭も一年一年を大切にしたい**

省吾さんが自分の営農スタイルを模索する中で転機となったのが、尚美さん（38歳）との出会いだ。法人の仕事にも慣れてきたころ、好きなバ

レーボールで体を動かそうと、地元のサークル活動に参加。そこで尚美さんと知り合い、23年に結婚。2年後に念願の独立就農を果たすことになる。実は、尚美さんの実家は町内の農家。三姉妹の末っ子で、農家を継ぐ気も、農家のお嫁さんになるつもりも無かった。しかし、偶然にも2人は出会ったのだから、当然、後継者になるのかと思ったら、いまは実家から農地を借りる形で、独立して農

業を営んでいるという。「地域の人たちから不思議がられます。でも、自分は今もうすぐ40歳で、作付けはあと20回、30回しかできないかもしれない。一年一年の経験がとても貴重なので、できるだけ自分の手でやってみたいと話したら、お義父さんは理解してくれました。と言っても、実家はすぐ隣なので、教えてもらうことは多いし、かなり迷惑もかけています」（笑）

現在、省吾さんが栽培しているのは、春レタス（12〜5月）と夏秋トマト（6〜11月）。0.83haの農地に120坪ハウスを8棟建て、通年で生産・出荷をしている。法人で5年の経験を積んだとはいえ、ハウスの日照や土壌が変わると、まるで勝手が違い、尚美さんの出産・子育ても重なって、1年目はかなり苦労したそうだ。

「3年目になってようやく、やりたいうことができる余裕ができてきました。新規就農の仲間と情報を交換したり、切磋琢磨するのも楽しい。ともかくいまは結果を出したいですね。天候とかどんな条件下でも安定した結果を出すのが農家。そんなすごい人たちに近づくと目標です」

むかわ町に来た時は一人だった省吾さんは、いまは尚美さんと長女のすずちゃん（4歳）、長男の敢太くん（2歳）と4人暮らし。「農業の魅力は、家族といつも一緒にいられること。近ごろ特にそう思うようになりました」と言う省吾さんは、農地に近い場所にマイホームの建築を計画 중이다。

仕事も、家庭も、一年一年を大切にしていきたいという佐藤省吾さんは、春の暖かい陽ざしの中、ハウスでは今年の定植を待つトマトの苗がきれいに並べられていた。

（フリーライター 森 由香）



会計ソフトについて相談に来た新規就農の仲間と



5月まで春レタスを出荷していたハウス。夏秋トマトへ切り替える準備中



8棟の120坪ハウス。来年はもう1棟増やす予定



トマトは6月に定植し、11月まで栽培管理・出荷が続く